慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小説家としての李笠翁
Sub Title	Li Li-Wêng as a novelist
Author	村松, 暎(Muramatsu, Ei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.69- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小説家としての李笠翁

村松暎

一

李漁は人生のあらゆることがらについて獨自の見解を持つてた。そしてその見解をもとにして、筋をつくり肉をつけて小説を書いた。小説のこうしたつくり方は彼より前にはなかつたと思われるので、李漁は中國小説史の中で、新しい手法を持ちこんだ功勞者ということができるだろう。明代までの小説には、家作の獨自な人生觀とか獨特の手法とかいつたものは見られないが、李漁の小説にはそれがあるのである。

李漁は物事に對して世間一般とは違つた見方、考え方をした。少くとも、世間に發表する場合には、そういうものを發表した。「當世耳目、爲我一新」[1]小説を書くにあたつて、こういつた抱負と自負とを持つていたのだ。考え方にも筋立てにも、新奇を狙つたのである。「新也者、天下事物之美稱也。」また「新即奇之別名也」[2]ともいつている。これは戲曲についていつている言葉だが、小説についても同じ考えを持つていたとみてさしつかえはない。

『十二樓』にせよ『無聲戲』にせよ、どれを一つとつてみても、李漁の小説には、すんなりと筋をはこんだものはない。どれもこれも、一ひねりも二ひねりもして、ひねりにひねつてある。突拍子もないことが起きてみたり、ああかと見えたものがこうであつたり、不運の連續が實は幸運につながつていたり、といつた調子である。

讀者の意表に出ること、それが〝奇〟であり〝新〟なのだ。そして、新奇であることが〝美〟だということになる。李漁はここのところを狙いすぎて、しばしば不自然に陷つている。『十二樓』の『夏宜樓』では、青年が令孃の心中をみごとに見抜いてしまう。全然會つてもいないのにズバリといいあて、

「人か鬼か、夢かまことか？」

というところで第一回が終り、第二回でそのタネ明かしをする。

結局これは、男が望遠鏡を使つてお孃さんが詩を書いているのをのぞき、その詩を讀んで心中の思いを知つたというわけだ。この時、男ははるかに離れたお寺の塔の上にいるのである。どんな良い望遠鏡だか知らないが、額の字を讀むわけではあるまいし、お孃さんが部屋の中で書いている詩が讀めるわけがない。どうしても、うそばつかり、という氣がしてしまう。嘘があんまりあらたかすぎて〝美〟とはいえない場合が少くない。

物語をつくるにあたつて筋を錯綜させるということは、李漁の主義であつた。彼はそれを裁縫にたとえている。[4] 筋をつくるのは着物をつくるようなもので、一枚の布をまず切りこまざき、後にそれを縫いあわせてつくり上げるのと同じだというわけだ。ここでは、だから針線（前後を縫いあわす脈絡）が重要だということをいおうとしているのであるが、物語の筋という點からみれば、相當たてこんだものだということになる。これも戲曲についていつているのだが、小説についても同じ考えだつたとみてさしつかえない。

なるほど、脈絡を失するといつたようなことは、李漁の小説にはないようだが、前半でむずかしくしておいた筋の結末へのもつてゆき方は、まつたくのご都合主義である。偶然の出來事があつたり、急に局面が有利に展開したりして、うまいぐあいにおさまつてしまう。これは李漁の作品ほとんど全部といつてよいくらいそうである。これは彼の作品がすべて喜劇だからかもしれない。喜劇というものは、筋だけとつてみれば、大抵みないい調子のものである。彼は戲曲、小説を娛樂と割り切つて、娛樂であるからには喜劇でなけれ

ばならない、氣晴しのために金を拂っているお客さまに涙を流させるという法はない、と考えていたのである。[5] 彼は涙が時には笑い以上の娯樂だということは考えたことがなかったらしい。もつともこれは李漁ばかりのことではなく、中國人というものの好みであるかもしれない。中国の戯曲、小説のほとんどが喜劇だし、『紅樓夢』も讀者を魅了しながら、悲劇であるという點で讀者をすつきりと納得させることができなかったのである。

先にものべたように、李漁はあらゆることについて彼一流の見解をもつていた。彼はその見解をテーマにして小説を書いたのである。[6] そして、そのテーマについて、小説の冒頭でいろいろと講釋をしているが、李漁の小説では、この講釋がなかなかの見どころなのである。小説のテーマについて冒頭で講釋をならべることは白話小説では、以前から行われていたので、形式としては珍らしくもなんともないが、いつていることが在來のものとは違うのである。明までのものだと、兄弟は仲よくせねばならぬだとか、親には孝行をしろだとか、善行をつんでおけば將來かならずよいことがあるだとかといつた、月並のものしかない。みな誰でも知つていることばかりで、作者獨特の考えというものは見られない。その點、李漁は自分の考えをのべているのである。

『合影樓』のテーマは要するに、男女が戀におちいつたら、どんなにせき止めようとしても無駄だ、というのであるが、ここで彼は戀をしている男女に對しては脅しも説得も無効だということをのべた後、色戀を防ぐのには男と女を完全に隔離する以外にないという。そして昔の聖人が男女の區別をきびしく説いたのは、身におぼえがあるからだなどといい出す。『奪錦樓』は婿えらびのゴタゴタを扱つたものだが、やはり最初に、娘の縁談がきまつた後に、もつとよい話が出たために先の縁組みを取消して悶着が起きたような場合、世間では約束を變改したことを非難するが、自分にいわせれば變改したくなるような縁組みを最初にしたことがよくないのだ、といつている。

私の解説が要領を得ないのではつきりしないかもしれないが、右の例でだいたいわかるように、李漁のものの見方、考え方というのは、ずばぬけた卓見というのでもなければ新しい考え方というのでもない。むしろ常識的である。それでいて、ちよつと視點をかえてみたり、議論の展開に細工をしたりして面白さを出している。そこにいわば彼の新しさがあるということになるのだ。

李漁は中庸を尚ぶ人間である。だから彼は享樂主義者であり、好色家であるが、どこまでも快樂を追求してゆく、といつた型の人間

ではない。

「〝房中の樂〟は一日とてなくてはかなわぬものだが、それを使いこなせるかどうかが問題で、生かして使えばこれにまさるものはない。それは參苓蓍木といつた死藥が、使い方では命を救うのと一般である。」(7)

というわけだ。「一日とてなくてはかなわぬ」とはいささかはげしいようだが、これは李漁的（あるいは中國的）表現と見て、とにかくここでは〝適度〟ということが主張されているわけである。

もつとも、この中庸ということは、李漁の場合、快樂の追求を抑制していることはもちろん否定できないが、同時にこれが快樂の追求を可能ならしめるものなのである。彼は『閒情偶寄』の「頤養部」上で、種々〝行樂之法〟についてのべているが、その前おきに、

「人生百年生きても三萬六千日、その全部が快樂の時だとしても限りがある。しかもいろいろといやなことばかり多い。だからできる時に樂しまなければいけない。故にここでは養生の法を論ずるわけだが、それに先立つて行樂の法をのべ、世を終るにいたるまで樂しみをなさるようにおすすめする次第である。」

というようなことをいつている。そしてこれにつづいて「頤養部」の下で「止憂」だとか「節色欲」だとか「療病」だとかいつた養生の法についてのべる順になつている。

つまり、人生を享樂するためには心身が健康でなければ長つづきがしないから養生が必要。それでこそ快樂が得られる。色欲を節するということも養生のうちで、これも快樂を得るための手段だということになる。『十二樓』の中の『鶴歸樓』は、快樂を節した夫婦が、結局においてはすえ永く快樂を享受することができ、はじめにガツガツしすぎた夫婦が失敗してしまつたという話である。李漁においては、快樂の强烈さよりも、一生の間に享受する快樂の總量が問題であるらしいのである。いかにも中國風な快樂主義者だということができるだろう。

二

『覺後禪』は李漁の作かもしれないといわれている。『納川叢話』にも「……又俗傳耶蒲緣、亦出笠翁手筆、余讀之良然」(8)とあり、

魯迅も「意想頗似季漁云々」といつている。私もすこぶる似ていると思うので、『覺後禪』を『十二樓』の作品や『簡情偶寄』と比較しながら、李漁の手法や思考の型を見ていつてみたいと思う。

『覺後禪』第一回の冒頭は女色論である。少し長くなるが、それをここに紹介してみよう。

「……人はこの世に生をうけてより、日々苦勞して、わずらわしいことのみ多く、どこといつてよいところもないが、それでもかの太古の世に天地を開闢し給うた聖人が、男女の交りという一件をおつくりくだされたおかげで、苦勞の息ぬきもでき、わずらいも解けて、それほどまでには憔悴せずともすむというわけだ。石頭の道學者先生にいわせれば、婦人の腰下のものは、すなわち我を生むの門、我を殺すの戸だというのだが、もののわかつた人の意見では、もし人生にこの一件がなかつたなら、おそらく髪の毛もなん年か早く白くなり、壽命もいく年か短かくなるだろう、とこう申される。（と、ここで僧や官官など女色に近づかぬはずの連中が早く老いこんでしまうといい）これを見ても女色の二字が人に害のないものだということがわかる。ただ『本草綱目』の中にこのようなことが記載されておらず、したがつて一定の解釋というものがないので、あれは人の養いになるという仁もあれば、害になるという方もあるということになるだけの話だ。だが、こうしてくらべて見てくるなら、やはり人の養いになるものだというだけでなく、その効能は、人參や附子と同じように、互いにそれぞれの働きをするということになる。ここに一つだけ注意せねばならぬことは、人參と附子とは、もともと補藥の大なるものではあるが、長く服んでこそよいので、たくさん服んではよろしくない。藥にしてこそよいので、飯にしてはならぬというわけだ。」

と、さらに藥とくらべながら、自分の家で樂しむべきで、よその女に手出しをしてはならぬ、という議論がつづいてゆくのである。

ここで氣がつくことは、この文の出だしが、先に掲げた『閒情偶寄』「頤養部」上の「行樂」第一の前おきとほとんど同じ調子だということである。また、藥と比較しての論議も、簡單ながら前に掲げた（註7參照）ものと同じ論法である。

『覺後禪』の作者はこの女色論につづいて、この小説を書いた理由を説明している。「（この書の本意は邪淫をとどめようというところにある、というのにつづいて）ところで人に淫をとどめ慾を押えさせようとならば、なんで一部の道學の書をあらわして風教を守ろうとはせず、風流の小説なんどを作るかといわれるなら、それは諸君、考えが足らぬというものだ。そもそも風俗を導くの法は、そ

の勢いのおもむくままにさそいこむのがよい。そうすれば、いうことも素直に受けいれられることになる。近ごろの人情は、聖經賢傳を手にすることを憚つて、小説を讀みたがる。このようなものの中でも、忠孝節義といつたことには目を蔽つて、淫邪誕妄の書を喜ぶ。淫靡の風は今日にいたつて極まれりといいつべしである。……書中、交媾の情を形容し、房幃の樂しみを摸寫して、いささか淫褻に似たとして、これは要するに、結果を知つて戒めの心も起ろうというもの。さもなくば……」

だからこの本を讀む時は經書だと思つて讀んでもらいたい、小説だと思つてはならぬ、とヌケヌケといつている。『覺後禪』は、結末を見れば一應因果應報の理を説き、善をすすめ悪をいましめるという體裁にはなつているが、どうひいき目に見てもそこに作者の狙いがあるなどとは正直のところいえた代物ではない。

『閒情偶寄』の「凡例」にも、李漁がこの書をあらわした意圖がのべてある。

「風俗のみだれはすなわち人心の悪化である。故に風俗を正すのには、まず人心を正さぬばならぬ。しかるに近日の人情、閒書を讀むを喜んで正論を聽くことを敬遠する。されば勸世の心ある者は、正面より説いては効果なく、譬えを引いて遠まわしに説くならば豫期以上の効果がおさめられる。この集が、まこと勸懲をもつて心としておりながら勸懲の題目を冠せず、名づけて閒情偶寄と稱するのは、人がこれを正論と目するを避けたがためである。勸懲の語は下半に多くあり、前の數巻にはすべて風雅を談じている。正論をはじめに載せずして終にのべたのは、人が雅より莊におよび、次第に深く入つていつて恐れを感じぬようにと願つたからである。」

莊論、正論とはどんなものだというなら、人によつて見方が違うかもしれないが、勸懲ということになればはつきりしている。『閒情偶寄』が勸懲を目的として書かれたとは、どうひつくり返してみたつて思えるものではない。李漁はそれをヌケヌケといつてのけるのだ。見えすいたことを、さもさももつともらしくいいくるめる、その論法がまた酷似しているのだから、『覺後禪』の作者と李漁の頭の出來ぐあいは、よくよく似ているというほかはない。

もう一つ。李漁は『十二樓』の「夏宜樓」で、男女の交りをさして、

「……およそたわむれ、いちやつきといつたことも眞面目なところがあればこそ絶えるということがないのだ。たわむれたりいちやついたりしていながら、その中で眞面目な仕事をしている者がいくらでもある。たとえば男女の交りは、もとより眞面目なことという

わけにはゆかぬが、それがなにゆえ千古に傳えられ、不朽の事となっているか？それはひとえにたわむれいちやつきの中から子供をつくって百世の家系を傳え、二人の血すじをのこすからだ。なんとたわむれながらも正に益あり、いちやつきながらも義にそむかぬことというべきではないか。」

一方、『覺後禪』第三回では、主人公未央生は新妻が交りに熱意を示さぬのを、なんとか教育しようと、春畫を買ってきて見せる。妻が、こんな不眞面目なものを見てどうするのか、と詰問するのに對して、未央生は答える。

「……というのも、これが天地開闢以來、第一番の眞面目なことだから、それで文人墨客が繪具をつかって畫き、綾絹で表裝し、書畫屋で賣り、學者の家で大事にしまっておいて、後世の人に手本にさせるのさ。さもなければ、陰陽交感の道はだんだんと滅びてゆき、將來かならず夫は妻を棄て、妻は夫にそむくということになり、生きつぐ道も絶えはてて、そのまま種が盡きるところまでいってしまうだろう。」

李漁の小説は、先にものべたように、冒頭でその小説のテーマについて種々意見をのべ、本筋に入ってその意見を實證してゆく、という形をとっている。

『覺後禪』の第一回は女色論であり、第二回は主人公未央生と孤峯和尚との對話による姦通論議である。未央生は才貌ともに人なみすぐれているところから、みずから天下第一等の才子をもって認じ、かかる上は天下第一の佳人を娶らんとの悲願を立てている。孤峯は未央生の色魔の性を見抜き、道を誤り大罪を犯さぬうちに佛門に歸依させようと思って説得にかかる。

佳人を娶るはよいとして、天下第一ということになれば、どうしてそれを見分けるか。第一と思って娶って後、よりいっそうの美人を見つけたらそちらを追いまわすことになる。その女がひとり身で一緒になることを承知すればよいが、亭主持ちだったらどうするか。それでも望みをとげようとすれば、そこからいろいろと地獄へ堕ちるようなことをしでかすことになる。あの世での報いなどということは信じぬというのなら、この世でも、人の妻に手出しなどして、鬼神も見ず、造物主も怒らず、自分の妻の貞節を全うさせるということがあるだろうか。かならず自分の妻も人に汚され、つくった借りを自分の女房で返さねばならぬことになるのだ。——

それに對して未央生の反駁は、

神さまが、もし軒なみしらみつぶしに姦淫を擧げてまわり、人の妻に手出しをした者には、そいつの細君で借りを返させるとしたら、神さまも相當な助の字だということになる。よし、そのようなことがあるとしても、もしひとり者がよその女に手出しをした場合には、なんでその借りを返すのか。それに、もし世の中の無數の女に手出しをしたとすれば、たとい自分の妻妾や娘で割引きされても、本手が少くて利益が多いということになる。この決濟はどうつけるのか。——

表面、孤峯はいい負かされた形になり、未央生はその後思い通りに行動してゆくように見えながら、實は自分の理窟もすつかり裏返しにして、孤峯のいつた通りになつてしまう。未央生は孤峯のもとを辭して後、評判の美人を娶るが、やがて女色行脚の旅に上り、なん人かの人妻と關係を結んで大得意の生活を送る。ところが妻を汚された夫の一人が復讐をくわだて、空閨をかこつている未央生の妻をたらしこみ、あげくに彼女を女郎屋へ賣りとばしてしまう。彼女は遊女として名を馳せるので、他の女の夫たちもその評判の遊女を買い、未央生は借りをそつくり取り立てられていたばかりでなく、妻を無數の男にもてあそばれて、莫大な利子まで拂わされていたというわけになる。そして最後に、未央生自身が評判を聞いて妻とは知らずにその遊女を買いにゆく。妻は夫を見て慚じて自殺し、未央生はいまさらのごとく因果應報の恐ろしさを知り、出家して孤峯の弟子となる。はじめの議論がすべて實證されたことになるのである。

李漁の小説を明代の擬話本あたりとくらべてみて氣がつく特色の一つは、滑稽味に富んでいるということである。大まじめに見せかけて〝聖人〟などをダシに使つたりして人を喰つた議論を吐いてみたり、物語りもみな、悪くいえばドタバタ風だが、次々と思わぬ事件が出來して中の人物があたふたするといつた仕組みになつている。敍述もそれに應じて輕妙である。この特色は『覺度禪』でも同樣で、むしろいっそう強くなつており、そのために猥褻なことがらを主題にしていても、いやらしくなつていない。このことは、主人公未央生の性格にもつともよくあらわれている。彼は無類の才子で色男だということになつており、本人も腹いつぱいその氣でいるのだが、それがなんとなく間のぬけた、すつとぼけた人物であるところに、なんともいえぬおかしさがあり、中國のこの種の小説の情景描寫の紋切型の退屈さを救つている。

私は『十二樓』と『覺後禪』とを讀みくらべてみて、小説家李笠翁という一人の人物に出あつた氣がした。たしかに孫楷第のいうように『覺後禪』が李漁の作だという確證はないが(9)、思考の型から手法まで、こうもよく似た人間は、同一人に違いないと思うわけである。ひよつとして、誰かが李漁に眞似て書いたということも、理窟としてはあり得ないことではないが、他人の筆に似せて、こんなに濶達自在に、しかもご本尊の作品とくらべて少しも見劣りのしないものが書ける人間というものは、まずあるまいと思うのである。

註

(1) 『與陳學山書』亞東本『十二樓』孫序より。
(2) ともに『閒情偶寄』巻一詞曲部「結構」第一。「脱窠臼」の項。
(3) 同右。「密針線」の項。
(4) 『閒情寓寄』巻一詞曲部「結構」第一。「密針線」の項。
(5) 傳奇原爲消愁設　費盡枕頭歌一闋　何事將錢買哭聲　假令變喜成悲咽(『風箏誤』)
(6) 彼は戲曲にはテーマがなければならぬ、といっている。『閒情偶寄』巻一詞曲部「結構」第一「立主腦」。李漁は戲曲と小説とは根本は同じだと考えていた。故に戲曲についていっていることは小説についても同じだとみてよいのである。
(7) 『閒情偶寄』巻十六「頤養部」下「節色慾」第四。……則房中之樂、何可一日無之。但顧其人之能用與否。我能用彼、則利莫大焉。參苓蓍木皆死藥也。以死藥療生人……
(8) 『小説攷證』續編巻二。
(9) 亞東本『十二樓』孫序。「此外還有肉蒲團一書，相傳也是笠翁作的。此書敍事不雅。語意儇佻，似乎也近於笠翁；但沒有確證，只可存疑。」